

梅雨明けと共に、日本列島は猛暑に見舞われています。この暑さと共に景気も上昇してくれると有難いのですが、なかなか思うようにはいきません。

売上げの減少に歯止めがかからず赤字を余儀なくされ、その現状を打開できずに呻吟する経営者も少なくありません。

私たち倫理法人会が学ぶ生活法則である純粹倫理では、こうした企業にとって厳しい状況「苦難をどう捉えるのでしょうか。そのためアプローチが二つあります。

一つは、苦難は「なぜ起こるのか」という観点で、すなわちその原因を求めるものです。倫理運動の創始者・丸山敏雄は、それを「わがまま」と説きました（もちろん先天的な疾患など、生まれながらに原因を抱えている場合もあります）。企業であれば、経営者がリーダーとして、純粹倫理という原理原則に沿わない「不自然な生活態度」ということになります。

いま一つのアプローチは、苦難は「何のために起こるのか」ということです。この問いに対して、丸山敏雄は明確に「苦難は人を殺すためにあるのではない。人をより善くし、より一歩を進めさせようとしてあるのである」と答えています。

これら二つのアプローチを時間軸上に置いてみると、原因を求める「なぜ」は過去に遡るうとするものであり、「何のために」は未来に向かうものであるといえるでしょう。この両方をしっかりと持ち合わせるからこそが、苦難を乗り越えるばかりでなく、それを活かして、よりよい人生を歩んでいく上で非常に

## 苦難こそが美であり 命を輝かす源である



重要な点となるのです。

さて、日本には古来から、地震などの天変地異、また病気などの個人的な苦しみに至るまで、およそ人に歓迎されない出来事を天のお知らせと捉える「垂示思想」がありました。「苦難とは、何かを知らせたり、教えたりするために起きてくること」と、より前向きに捉えたのです。すなわち苦難とは、それを受けた人にもたらされる情報に他なりません。そうした情報を、まずは「これがよい」と受け止めることが大切になります。そして、

その原因を的確に捉え、自身の生き方をより善くしていく時に、それはかけがえのない価値を持ちます。ただし、「これがよい」と受け止めるのは、何もそれが自分のためになるからだけではないのです。丸山敏雄は次のように述べています。

実をいうと、苦難が世の中にあるのは、戒めになるとか、為になるとか、そんな欲得づくのことではない。また、これがよい結果に終わるとか、喜びに転ずるとか、そうした意味から苦難をたたえるのもない。苦難はそのまま美である。幸福と苦難と表裏一体、善と悪と陰陽不二、個々に宇宙無限の美がある。（中略）

ここまでくると、苦難はそのまま、美に光り、善に輝いてくる。苦難そのまま「がよい」のである。（『人類の朝光』）

え・栗木 映

歴史的な大転換の時代に、自身の命をまします輝かせ、企業とそれに関わる人、地域、ひいては日本の未来を、より善く切り拓いていこうではありませんか。